

リンパ脈管筋腫症への生体・脳死肺移植 — 福岡大学肺移植プログラムの経験 —

宮原 聡 ¹⁾	白石 武史 ^{1),3)}	平塚 昌文 ^{1),3)}
柳澤 純 ¹⁾	阿部 創世 ¹⁾	永田 旭 ¹⁾
若原 純一 ¹⁾	稲富 香織 ¹⁾	森 遼 ¹⁾
今村奈緒子 ¹⁾	諸鹿 俊彦 ¹⁾	早稲田龍一 ¹⁾
吉田 康浩 ¹⁾	吉永 康熙 ¹⁾	山下 眞一 ¹⁾
白石 素公 ²⁾	石井 寛 ²⁾	藤田 昌樹 ²⁾
渡辺憲太郎 ²⁾	當房 悦子 ³⁾	岩崎 昭憲 ¹⁾

¹⁾ 福岡大学病院 呼吸器・乳腺内分泌・小児外科

²⁾ 福岡大学病院 呼吸器内科

³⁾ 福岡大学病院 臓器移植医療センター

要旨：はじめに：リンパ脈管筋腫症（LAM）は稀な嚢胞性肺疾患であり，平滑筋様 LAM 細胞が増殖し閉塞性換気障害を来す。肺移植は末期呼吸不全を呈する LAM 患者への最終的な治療であり，日本は欧米諸国と比較して LAM に対する肺移植が多い。当施設での LAM への肺移植経験を報告する。

対象と方法：2005 年 5 月から 2015 年 12 月までに脳死肺移植待機登録をおこなった 54 例を対象とした。そのうち 7 例の LAM を抽出し背景を明らかにし，周術期間および生存率に関して LAM 症例とそれ以外の肺移植症例を比較検討した。

結果：脳死肺移植待機登録を行った 54 例のうち 7 例が LAM で，4 例に脳死片肺移植を実施し，脳死移植を待てずに生体肺移植を行った症例が 1 例あった。1 例は待機中で，待機中死亡が 1 例あった。性別はすべて女性で診断時の平均年齢は 38.5 歳，診断から登録までの平均期間は約 8 年であった。術後の真菌感染による遠隔期死亡が 1 例あったが，他の 4 例は完全社会復帰を果たし，5 年生存率は 80% と他の疾患群の 59.2% と比較して良好であった。

結論：末期呼吸不全を呈する LAM に対する生体および脳死肺移植の成績は良好である。若年女性患者が多いため耐術性に優れていることや原疾患の進行が緩徐なため，我が国の脳死肺移植における長い待機期間を生存できる可能性が高いこと等が寄与している可能性がある。

キーワード：生体肺移植，脳死肺移植，リンパ脈管筋腫症